

# 私はいつでも日本に行って証言しますよ

南京大虐殺のさなか 父は殺され私も母も性暴力被害をうけた

楊明貞

1930年2月生まれ (右の写真撮影: 松岡環)

私は50代の竹細工職人の父親と母親に可愛がられて育ちました。12月14日夜中に逃げようとしたが日本兵に橋のところで追い返されました。次の日日本兵が家に押し入って私を助けようとした父は日本兵に首を切りつけられました。

12月15日。午後、再び二人の日本兵がやってきました。前日日本兵に斬られた父は衰弱して横たわっているだけでした。日本兵はまず、父の所へ近づき父の目を指で開き、刀を口の中に差し込みました。



▲家族で逃げようとした大中橋の上で当時を語る楊明貞さん(撮影: 松岡環)

次に母親に近づき、ズボンをずり下げました。母は日本兵の手をかみました。怒った日本兵は母を何度も殴ってから、強かんしましたその後、日本兵はお構いなしに母親の性器に銃身をねじ込んで弄びました。母は何度も許してくださいと泣いていました。母の下半身からたくさんさんの血が流れ出しました。もう一人の日本兵は、私のズボンをずり下げ、指でまだ固い性器をこじ開けながら弄びました。私は痛さで泣き喚きました。それでもその日本兵は強引に私を強かんしました。奴らは畜生です。二人は交代して私と母を続けて強姦しました。大量の血が流れ、痛さで歩くことさえできないほどでした。母は倒れていきましたので、私は性器に布を自分で当てて、手当をしました。性器が腫れ、血が流れ出ました。おしつこも知らない内に流れ出し、傷にしみて痛くてたまりませんでした。

父が亡くなり、母も精神的におかしくなりやがて父の後を追うように死んでしまいました。両親を失っていたのでその時に痛めた泌尿器を治療することもできませんでした。それから今日までずっと失禁に悩まされ、普通に小便をすることができません。現在に至るまでオムツを離せない障害が残っています。

1998年南京大虐殺60カ年全国連絡会の招請で来日。中国でも話すことが無かった南京大虐殺性暴力被害を日本のみなさんに初めて語りました。2000年東京での国際女性戦犯法廷に南京性暴力の証人として出廷、日本軍の暴行と私が受けた性暴力被害を訴えました。



南京大虐殺60カ年全国連絡会が招請した来日証言者と家族との食事会の記念写真。1年に2回南京飯店で食事交流会を行っています。

食事会ではおしゃべりや歌が飛び出し、幸存者たちと日本側の楽しいひと時はあつという間に過ぎていきます。「また半年後に元気で会いましょう。」の約束が決まり文句です。私たち市民運動は、日本政府が正式に南京大虐殺を認めるまで、彼らが元気でいて欲しいと願っています。

写真右:養老院にいる楊明貞さんを毎年お見舞いしています。  
(撮影: 林伯耀)



▲1998年「レイプオブ南京」大阪証言集会  
プライバシー保護の為に日本での証言はスクリーン越しに行なった(撮影: 林伯耀)





▲村人や大日本国防婦人会の人々は総出で神社に必勝祈願した(日中平和研究会提供)

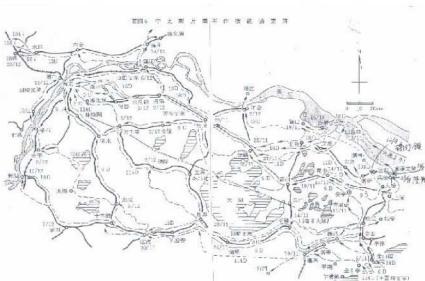


▲兵営から出征する兵士達を人々は「お国の為に戦え」と送り出した  
(提供:日中平和研究会)

## 「南京大虐殺」とはなに?

1937年盧溝橋事件を契機として、日本による中国侵略は激化しました。戦火は一ヵ月後上海に飛び火、中国軍民の激しい抵抗により、激戦が3ヶ月にも及びました。日本軍が上海とその南部の杭州湾から大挙して南京に攻め込むまでの間、行く先々で中国民衆を虐殺、強かん、また、食料を奪い放火し生活を破壊しました。日本政府は暴支膺懲の声明を出し中国侵略をおし進めました。

1937年12月13日、当時、中国の首都であった南京になだれ込んだ日本軍は大虐殺をひきおこしました。日本軍は6週間以上にわたり、南京市府の管轄していた地域で、世界に類を見ない野蛮な行為をくりかえしました。南京大虐殺は別名「南京レイプ」とも称されています。勝ち誇った日本軍は、無抵抗の女性、老人、子供を含む南京市民や武器を捨てた元兵士に、虐殺・強かん・放火・破壊・略奪とあらゆる暴行をはたらきました。日本軍が南京で虐殺した人数については、南京軍事裁判での埋葬調査などの資料によると30万人以上。強かん事件だけでも、2万件以上と記されています。その詳しい内容は、南京戦に参加した元兵士の赤裸々な証言から、また南京で九死に一生を得た生存者の証言から、歴史の事実を知ることができるでしょう。



▲上海～南京へ約20万人の日本軍が攻め込んだ(南京戦史資料集より)



▲日本軍の爆撃で廃墟となった上海市街を掃蕩する日本兵(提供:日中平和研究会)

## 大虐殺の主な要因

- 第1、日本政府の声明「暴支膺懲」(暴れんぼうの支那を力で屈伏させる)に見られるように、中国民族への差別感がありました。
- 第2、対中国戦争に国際法の規定を適用せず「事変」と称して侵略を進めました。
- 第3、日本軍は、捕虜を保有しない方針で、兵とみなした市民を大規模に虐殺しました。
- 第4、食料など、必要なものは現地調達(略奪)とする、補給観念のなさがありました。
- 第5、軍隊内での不法な虐待と暴力的体罰が充満している中では、敵国人に対して、凶悪残酷な行為がくりかえされました。



▲日本軍は集団虐殺の後、証拠隠滅の為死体を焼いた(輜重兵第一聯隊 村瀬守保氏撮影)



▲南京市街は略奪、放火、殺人が日常的だった  
(提供:侵華日軍南京大屠殺遇難同胞紀念館)

## 南京大虐殺を証明する日本軍関係の資料

日本軍南京特務機関作成資料によると、「南京の下関付近に慈善団体に埋葬させた死体は、31791体。」と記しています。また、日本軍戦犯を収容した撫順戦犯管理所の資料には「南京の下関で命令により、何日間もかけて自分と安達少佐が約10万体の中国人の屍骸を揚子江に流したり焼却処理をした。他の部隊の処理は5万体だった。」との太田寿男少佐本人自筆の供述書が現存しています。集団虐殺を記録した戦闘詳報や日記も残存しており、集団虐殺をした元兵士の証言はたくさん記録されています。しかし、日本社会では、南京大虐殺を否定し、史実を歪曲矮小する人々が存在します。中国やアジアの人々と眞の友好関係を築くためには、まず、歴史に真正面から向き合って行くことが不可欠と言えるでしょう。

【パネル製作:銘心会南京 松岡環】

# 南京の至る所でごう姦・虐殺・放火・略奪



## 揚子江沿いの集団虐殺 刘永興 1914年11月生まれ

私の家族は5人で助け合って暮らしていました。当時私は23歳でした。12月15日の午後、遂に家にも日本兵が入ってきて私と弟が銃で脅され引き出されました。広場に集められた4千から5千人の人々が移動することとなり、8人の列で前に警察官、後は一般の男たちで私は列の後ろの方について行きました。列のあちらこちらに銃を持った日本兵が監視して歩いています。最後の方には、日本軍が機関銃をいくつも抱えていました。北の城外の下関まで、かなりの距離（約六キロメートル）があります。途中で国民党の兵士や一般の市民が、すねを針金で縛られて殺されているのや、女性が暴行されて下半身裸で転がっている状況をたくさんこの目で見ました。

劉永興（撮影：松岡環）

日本軍が少し離れた場所で機関銃掃射をして殺し始めました。「助けて！」と言う声があちこちで聞こえていました。ものすごい機関銃の音がずっと続いていました。弟にも弾が当りました。周りの人もバタバタ倒れていきます。日がすっかり暮れて日本軍が死体の山の上に乗つかって、うめき声を出したり、生きている人を見つけると銃剣で突き刺してとどめを刺していました。私は小舟の影に隠れ死体といっしょに水につかってじっと死んだふりをしていました。やっと真夜中頃、日本軍が引き上げたので、辺りを注意深く見回すと、私と後7～8人ほどの人影が動いていただけでした。



▲水辺に折り重なる死体の群れ  
(輜重兵第一聯隊 村瀬守保氏撮影)



▲5000余人在悼む中山埠頭  
虐殺記念碑（撮影：松岡環）

## 南京南郊外（中華門の南東）曹秀蘭 1919年8月生まれ

私は当時18歳でした。冬のある日、日本兵が来ると聞いて布団とか服などを持ち出そうとしていると、5人の鬼子がきました。日本兵はお産をしたばかりの兄嫁を強姦した後、二人がかりで銃剣で刺し殺しました。血が太ももを真っ赤に染めました。義姉の生まれたばかりの赤ちゃんは銃剣でお尻から刺して持ち上げられました。泣き叫んでいる様子を見て日本兵ははやしたて笑っていました。その後、赤ちゃんも小さな弟二人も突き殺されました。お昼頃には、うちから豚1匹と鶏4匹をつかまえて出て行きました。朝の内に、外に避難していた姉二人が家に戻って来たところ、家から出てきた5人の日本兵に姉達は捕まってしまいました。服を全部脱がされ姉たちの「助けて」と懇願する声が聞こえていました。手と足を括った後、日本鬼子は、姉たちを代わる代わる強姦し、終わってから銃剣で刺し殺しました。それでも気がすまないのか、油を家中に撒いた後、火を点けました。



曹秀蘭（撮影：松岡環）



▲12月13日中華門を侵攻する日本軍(図録「南京大虐殺」より)

## 父母も兄姉も殺されひとりに

当時、私は部屋の外にある便所に隠れていて日本兵に見つかりませんでした。その小さい穴から外を覗き、我が家で起きた事を見ました。父母や兄など家族7人は外に連れ出されてしまいました。後になって人から聞いて分かったことですが、丸太を運ぶ仕事で、後5人の兄弟も同じ仕事をさせ、両親たちと同じく首を切られ殺されました。これなどは昔の話ですけれど、今でも思い出したら心が痛いです。家族15人は貧しくても助け合って暮らしていました。私と他家に嫁いだ姉だけ生き残って、後13人は全部日本鬼子に殺されました。孤児になった私は食べてゆくのも本当に苦労しました。

【パネル製作： 銘心会南京 松岡環】

# 南京レイプ・南京大虐殺は事実！私が生き証人だよ

## 行きたくないけど日本へ行かなくては

松岡さんたちから日本で私の身に降りかかった南京大虐殺を証言して欲しいと頼まれましたが、日本には行きたくありませんでした。しかし「日本では南京大虐殺や南京の性暴力を否定する人たちがいます。」と言われ、「南京大虐殺がなかったなんてとんでもない、私が生き証人だよ。」と歴史を知らない人や若者にぜひ私たちの被害をはなそと決心しました。88歳の高齢でしたが、大虐殺の中いっしょに逃げた一人息子も日本で本当のことをしっかり話しておいでよと勧めてくれました。

(▼張秀英さんの家の前で聞きとりをする 撮影:日中平和研究会事務局)



▲国会議事堂の前で、右朱成山館長、その隣は  
張秀英さん(撮影:林伯耀)



元気になった張秀英さんと再会を喜ぶ(撮影:「銘心会南京」友好訪中団)



93歳の張秀英さん07年5月家族に  
看取られて永眠(撮影:松岡環)



張秀英 1914年4月生まれ(撮影:松岡環)

私は南京の浦口に近い村に夫と子ども2人の4人家族で毎日を穏やかに暮らしていました。日本兵が北から攻めてきた時、村に入って放火し人を殺し始めました。私の目の前で村人が次々と殺されていました。夫は地主の用事で遠くにでかけていたので、二人の子供を連れてしばらくして逃げようと思っている内に日本兵がやって来て。地主の家に隠れていた私を見つけると腕を掴みました。恐怖で動けないと、近くにいた小母さんに「言う事を聞かないと殺されるよ。子供を私によこしなさい。」と言われ、長男を預け、仕方なくついていくしかありませんでした。強かんされている間に3ヶ月の娘は焼き殺されました。その後も山の中を長男を連れて逃げ回りました。強かんしようとした日本兵に切りつけられた事もありました。多くの中国人を手当たり次第に殺し、私を辱め娘を焼き殺した日本人を許せません。日本の証言会場のピース大阪で日本の市民に語りました。会場の周りには右翼の街宣車が取り囲み大音響の悪口が聞こえていましたが、会場いっぱいの参加者たちは、私に大きな拍手を送ってくれました。



## 南京大虐殺受難者追悼のデモ

1999年大阪で開催した国際市民フォーラムには米中韓日の歴史研究者市民運動家が集い、南京大虐殺の究明と反侵略反戦の研究集会を行いました。集会後各国の参加者がデモに参加し大阪の街で市民に呼びかけました。南京大虐殺60年全国連絡会が主催する証言集会は96年より毎年全国10都市で開催しています。

▲南京大虐殺受難者への夜の追悼デモ(撮影:林伯耀)

南京戦参加兵士の証言

# 地獄と言えば地獄 惨いことでした



鈴木力男

1914年2月生まれ 南京戦当時 第十六師団歩兵第  
三十三聯隊第一機関銃中隊 (提供:日中平和研究会)

戦争前は、父親と一緒に魚屋をしていて、商売はうまくいっていました。

南京が落ちてすぐ下関の手前まで来た時は、もう鎮江やら紫金山やらから逃げてきた中国兵が右往左往していました。中隊長の「掃蕩にかかり！」で数人で組になってな、歩兵も機関銃も砲兵も小銃やごんぼ剣〔銃剣〕持って大きな道を通って下関に向かうんですわ。攻め込んでいくと、大きな道路に飛び出してきた中国兵が群れになってまた逃げて行くんです。わしら、日本兵は撃たないしゃあない。逃げるのは兵隊だけやない、男の子もおれば女人もおる。若い衆もおる。そんなものお構いなしにめくらめっぽうに連続発射で流すんやから、角度を決めて左右にスーと流すんやから。もう前方で人間を見たら、重機をバッと組み立てて全部殺すんや。

その日下関に着いたら、もう勝った勢いでな、向こうに敵ということで撃ちまくった。エンジンのないような、櫓でこぐのような舟が揚子江をドンドン流れいくんや。いっぱい人が乗っててね、それを撃つんですね。中には普通の服着てる良民もいる。それを全部ダダーと撃つた。下関にいる歩兵のさまざまな部隊もここかしこで撃っている。

同時に揚子江の河岸にも大勢の押し合いへし合いの人があなだれ込んできてな、人はドンドン増えてきた。向こう岸へ逃げ切れなくて人間の固まりとなって岸壁に集まっていますんや。もう何千という人の数や、そこに向けて今度は、誰彼なしに九二式重機関銃を撃ち込んだんです。機関銃中隊一個小隊で二銃、一個中隊で八銃の重機関銃です。押しまくりました〔押すと弾丸が出る〕。港にぎっしりと集まつた大勢の人は、女も子どもも年寄りもいましたわ。四百～五百メートル向こうにいる中国人たちに射撃の角度を考えて、範囲を決めて撃ちました。人の固まりが崩れていくんですわ。(右写真:輜重兵第一聯隊村瀬守保氏撮影)



せめて白い布でも掲げてくれたらとな、かわいそうと思つたら戦争するんもんやないと思う。我々はただちに小隊長から「撃て」との命令を受けたけど、(中国人なら誰でも殺すという)命令は、師団長が出したんですやろな。

左写真:話しているうちに鈴木さんは倒れてしまった  
(撮影:松岡)

右写真:1939年華中の駐屯地の鈴木さん(提供:日中平和研究会)



暮れなずむ冬の揚子江、下関から臨む。今は減水期だ(撮影:松岡環)

次の日も、同じように下関で重機関銃を撃ち、大勢の人を殺しました。機関銃中隊は、歩兵といっしょに行動することは少なかったけど、掃蕩には参加しました。逃げ遅れた兵は白い布を立てていてね、ほとんどが兵の服装をしていました。みな集めて軍司令部へ連れて行くんです。中国軍の服装はまちまちで普通の服も着てました。捕まえた捕虜を揚子江岸で処分するために、また、機関銃を撃ちました。戦争は絶対にするもんや無い。むごいもんやと思います。

【パネル製作:銘心会南京 松岡環】

# 南京戦参加兵士の証言 中隊長は「強かん、強盗、放火、殺人、何でもやれ！」と言った



▲自宅での取材(提供:日中平和研究会)

南京では、暇でほかに何もすることないから、女の子を強かんした。部隊の兵隊が、勝手に出ていって、クーニヤン徵発していると知っていても、将校は何も言わず黙認やつた。家に入るとな、女の子はいろいろなところに隠れてるんやで。家の中におったり、畑で隠れているのもいた。たいていの女の子は、鍋墨で顔を黒く塗ってたな。



▲女性達は大きなわら山の中に隠れても、日本兵が銃剣で突き刺したり火をつけたりして捕まってしまうことが多く、その場で強かんや連行があった。撮影:松岡環

クーニヤン搜しは分隊や数人で行くことが多い。見つけるとな、分隊の何人もで押さえつけたんや。それで、女の子を強かんする順番をくじで決めた。一番のくじを引いた者が、墨を塗っている女の子の顔をきれいに拭いてからやつた。交替で五人も六人も押さえつけてやつたら、そらもう、泡を吹いているで。兵隊もかつえ〔飢え〕ている。女の子は殺される恐ろしさでぶるぶる震えている。南京で、二、三人でクーニヤン搜しに行った時、きれいな中国服を着た、国民党の偉いさんの奥さんと思うが家の中で隠れていた。「ピーカンカン」と言うと、殺されるのが恐いから全然抵抗せんで、大人しく裾を持ち上げたので、わしらはさせてもらつた。日本中の兵隊がしていることや。言うか言わんだけの事や。

南京大虐殺は本当にあった話や。天皇陛下の御為にとわしらはだまされて戦争に行った。

## 三木本一平(仮名) 1913年9月生まれ 第十六師団歩兵第三十三聯隊第二大隊

戦争が始まった時、わしは、嫁さんもろうて父親と同じ漁師をしていました。伊勢の海に出ると、魚はようとれた。

赤紙がきて戦争に行ったんや。南京の手前の句容というところに朝香宮さんが来られたので、わしら一個小隊は、中隊長とともに夜中に護衛についたで。中隊長の天野郷三中尉は、宮さんの警護といふこんな時でも女の子を抱いて寝ていたんやから。ここにいる時、天野はわしら兵隊に「強盗、強かん、放火、殺人、何でもやれ」と言ったんやで。

嫌がる女の子を連れてくるとな、「取り調べるなにがある」と兵隊の前でうまい作りごとを言って、自分は女を抱いて寝ているわけだ。天野は、毎晩違う女を捕まえさせた。若いのもおれば、お母さんのような人も捕まえ、抱いた後は女の子を放してやつたけどな。



▲金陵女子文理学院(現南京師範大学)には、南京大虐殺当時1万人を超える若い女性が避難していたが日本兵は常に入り込み女性を拉致した(撮影:松岡環)

「ピー、カンカン〔性器を見せろ〕という意味で兵隊が使う中国語」と言うと、たいがい、どの娘も服を捲って、おとなしく見せてくれた。国際赤十字の旗が立っている所に、南京の女の子はみんな逃げ込んでいたな。町の中には女の子はいないので、女の子捜しは、たいがい郊外へ掃蕩などに行くと見つけられる。点々とつながっている部落で悪いことをしたんや。



日本軍の砲撃で崩れた城壁



浅香宮監視哨の立て札  
(提供:日中平和研究会)

# 死体処理と埋葬・南京軍事法廷裁判

## 埋葬死体と河に流す処理

南京陥落の1937年12月13日以降、城内や郊外の掃蕩が何度も行われ男女を問わず市民や武器を捨てた兵士が集団虐殺あるいは個別で殺害されました。日本軍が入城式に行進する中山路などの大通りの死体は処理されたが、その他の路や空き地、屋内には死体は放置されたままでした。12月末頃から中国人慈善団体等(紅卍字会、国際赤十字会、崇善堂、傀儡の自治委員会、篤志家など)が膨大な死体の処理を始めました。東京裁判では埋葬死体のみに關して約20万体と判定されました。日本軍によって焼却、河に流す死体は含まれませんでした。第二碇泊場司令部の太田少佐と安達少佐の2名は、南京の虐殺死体約10万体を揚子江に流す作業をし、他の部隊が5万人の処理をしましたと本人の詳細な供述書が遼寧省档案館に存在します。

▼太田寿男の供述書には下閑での死体処理の数や現場の様子が詳しく書かれています(提供:日中平和研究会より)



▲集団埋葬の小山が南京各地に見られた。吉林寺付近の墓地 (提供:侵華日軍南京大屠殺遇難同胞紀念館)

## 埋葬の塚や埋葬の小山の列

日本軍によって集団虐殺されたり個別に殺害されたおびただしい数の死体は、親戚縁者が見つけた時には引き取られます。多くは一家全滅だったり、他所で殺害された為に、河に流さたり野ざらしになった死体が大変多かったです。慈善団体などに収容された死体は空き地や河辺の地に大きな穴を掘って臨時に集団埋葬されました。現在も侵華日軍南京大屠殺遇難同胞紀念館には85年、94年、07年に建設作業の過程で掘り出された遺骨が展示(安置)されています。

## 世界を駆け巡った大虐殺のニュース

### 南京軍事法廷の裁判

1946年、南京軍事法廷によるBC級戦犯を裁く裁判が行われました。南京大虐殺に関しては埋葬数を記録した中国紅十字会南京分会や世界紅卍字会が埋葬統計表に記すとおり、おびただしい遺骨が掘り出されました。記録にある他の埋葬地も発掘され、日本軍の残虐な行為が検証され裁判の証拠とされました。記録に基いて犠牲者総数は30万人以上に達すると認定し、南京軍事法廷は、南京大虐殺に関係した将兵を裁判にかけました。捕虜や市民の虐殺、強姦、略奪を命令した第六師団長の谷寿夫、百人斬り競争をした向井敏明、野田毅、多数の中国人を虐殺した田中軍吉が死刑の判決を受けました。

▼南京軍事法廷が掘り起こした遺骨(提供:侵華日軍南京大屠殺遇難同胞紀念館)



(写真:図録「南京大虐殺」)

▲シカゴデイリーニュースのスティール1937年12月15日(南京、米艦オアフ号より)  
シカゴデイリーニュースのスティール「南京の包囲と攻略を最も相応しい言葉で表現するならば、‘地獄の4日間’と言う事になるだろう。まるで羊の屠殺であった。(中略)今日この門(挹江門)を通った時5フィートの厚さの死体の上をやむなく車を走らせた(中略)そこにはかつて200人ほどの人間であった筈の物がくすぐる肉の塊と骨片の集まりになっていた。」

(写真:図録「南京大虐殺」より)

▲ニューヨークタイムズのダーディン1937年12月17日(上海、米艦オアフ号より)  
ニューヨークタイムズのダーディン「(略)上海行きの船に乗船する間際に記者は岸辺で200人の男性が処刑されるのを目撃した。処刑者は壁を背にして並ばれ射殺された。銃を手にした大勢の日本兵は、ぐちゃぐちゃになった死体の上を無頓着に踏みつけて、ひくひくと動く者があれば弾を撃ち込んだ。」